

看護部

看護部長 松川 菜穂美

【看護部の理念】

私たちは病院理念に基づき、市民の皆様に信頼される質の高い看護を提供します。

【基本方針】

- ・ 人権を尊重し、安全・安心な看護を実践します。
- ・ 地域との連携を深め、継続的な看護を提供します。
- ・ 知識・技術・感性を磨き、自律した専門職を育成します。

【令和6年度目標】

- ・ 患者家族に寄り添った看護を提供する
- ・ 高度化、拡充する医療に対応できる人材の確保と育成をする
- ・ 救急、集中治療、手術、各部門の組織の体制強化を図る
- ・ 経営・新病院を意識した効率的な病床管理をする

1 看護部として

令和6年度、看護部は「互いにやさしく互いを大切に」し「強みを活かして役割を果たす」の精神で、丁寧に関係性を持ち、病院職員の一員として、また個人の持てる才能・能力、そしてブランドに気づき、それを活用し、やりがいを感じながら市民のみなさまに還元することを目指しました。

看護部の関わった主な取組みとして、整形外科や脳神経外科の診療拡充に伴い、安全で安心できる看護ができるよう部門横断的に、他職種で構成された組織が効果的に活動できる仕組み作りや実践力を高めブラッシュアップを図っています。前年度に引き続き、入院を断らないために主科にとらわれないベッドコントロールをし、少子化のあおりを受けている産科病棟でも、多岐にわたる診療科の女性患者を受け入れ、市民のみなさまに期待される役割を果たしました。

地域保健の活動としては、疾患の理解や疾病予防、母子保健等についての出前講座を行い、地域住民や学生と交流しました。また、令和6年度の新たな取り組みとしては、思春期保健相談士である看護師が地域の中学校に訪問し、思春期特有の悩みや命を考えるための授業の講師を担わせていただきました。

看護部としても令和8年秋の移転開院準備を進めています。看護職員の人材確保と育成に尽力し、看護協会の「生涯学習ガイドライン」を活用し、自律して自発的に啓発できる職員育成を目指した支援を行っています。

この先も、進歩する医療と共に質の高い看護を受けていただけるよう、千葉市の病院として努力して参ります。

業務担当

副看護部長 田口 理英

令和6年度は、2年後に迎える新病院移転を見据え看護の質を担保しながら高度化・拡充する医療に対応するために、看護部の業務委員会・記録委員会・アシスタント会が統合されました。委員会活動を通して、効率的で標準化された看護を実践できる体制づくりを目指しました。看護部は、看護職だけでなく多くの看護補助者が看護チームの一員として活躍しています。また、社会における看護へのニードが変化する中において、それぞれの職員が専門性を發揮できるよう職種別に業務基準や手順を整備し、看護補助者の活用を促進しました。

効率的な病床管理のために、眼科女性患者の7階病棟入院を開始しました。同時に、診療報酬改定へ対応するために、診療局と連携を取りながら多職種ワーキングを立ち上げ、白内障1泊入院の体制も整備しました。また、看護師長を中心に、診療科の枠を超えた病床管理を実践し定着しつつあります。

さらに、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止されていた適時調査が5年振りに実施されました。指摘事項はありませんでした。この機会に、日常の管理体制や患者・家族に提供している医療・看護の質について振り返ることもできました。

次年度以降も多職種と共に新病院移転に向けより具体的な準備をおこないながら、千葉市立海浜病院の職員として患者・家族の思いに寄り添ったチーム医療を提供するための体制づくりに継続して取り組んでいきたいと思います。

労務・総務担当

副看護部長 大塚 奈和子

新病院に向けて、拡充する診療に対応しながら、多様な働き方を認め合い、すべての看護職員が安心・安全に働き続けられる職場づくりに取り組みました。勤務の計画から勤務実績に関しても、状況に合わせ柔軟に労務管理を行いました。年休は、昨年度より取得日数は増加することができ、個々に合わせた働き方を目指し、働きやすい職場環境を整備しました。外部行事では、ゆうあいピックなどの地域のイベントへ参加することができ、地域での活動の場を持つことができました。

今後も、千葉市立海浜病院としての役割を果たせるように、働きやすい職場作りに取り組み、患者に寄り添った看護の提供、職員も安心安全な環境作りに取り組んでいきたいと思います。

教育担当

副看護部長 町田 裕子

様々な社会背景のもと、2023年日本看護協会は、「看護職における生涯学習ガイドライン」を策定し、そのなかで雇用する組織には、働く場での学びを支援すること等を推奨しています。前年度作成された「千葉市立病院キャリア開発ガイド」は、看護職員が生涯学習を進めていく際の羅針盤として活用を始めました。研修計画では、看護職が自らの実現したい看護を主体的に学べるよう、研修項目数・時間数を拡大し、支援を強化しています。同時に、看護師長をはじめとした現場管理者や教育担当者は、「看護実践能力に基づく学習項目」や「学習マトリクス」、「看護実践能力の実践例」等を用いて、働く場で看護職員一人ひとりが必要な学びの確認や生涯学習の計画、定期的な学び直し等の支援を行っています。

今後も、学びの場と働く場をつなげながら、看護職員一人ひとりが専門職業人として成長できるよう、環境を整えていきたいと思います。

人材確保担当

副看護部長 田口 理英 大塚 奈和子

今年度の人材確保として、病院局・青葉病院と共同し、複数のイベントに参加しました。イベントでは、千葉市立病院のことをより理解していただけるように、現場で働く職員と直接交流できる場を設けました。また、海浜病院・青葉病院の両病院見学会を開催し、その中では認定看護師からの講習会を実施しました。

次年度以降も、千葉市立病院として「患者・家族に寄り添った看護」を実現するため、千葉市立病院を知っていただき、人材確保に向けた活動を継続していきたいと思います。

2 各部署の目標と評価

病棟目標は部署の特徴にあわせて立案され、スタッフの個人目標に繋がり、概ね達成できました。看護力の強化に繋がったと評価しています。

部署	重点目標と評価
7階病棟	「患者と家族に寄り添い、安心で満足できる看護を提供する」「お互いを尊重し、共に学び成長する」を目標に取り組んだ。妊娠期よりFAST介入を要する対象を抽出できるようにツールを作成し、必要な支援が遅れることなく提供できるように仕組みを整えることができた。新たにマニュアルを整備し1月より眼科白内障手術の患者を受け入れることができた。前年度から取り組んでいる病棟内の災害訓練は医師も参加し実施することができ、安全な療養環境のためにチームで取り組むことができた。

	チーム内でのリフレクションの開催や、学びの共有ファイルを作成することで、他者の学びや看護実践を自己の成長へつなげる機会を作ることができた。
6階病棟	今年度は、「一人一人の患者さんを大切に一緒に働く仲間も大切にできる病棟」を目指し、患者・家族が望む場所に、最良の状態で退院できるよう意思決定支援に力を入れた。退院支援カンファレンスを見直し、患者のゴールを考えながら必要な情報や支援について多職種で意見交換できるようになった。また、入院時に患者背景や望む退院先等を確認し記録することや退院訪問等を通して、意思決定支援や多職種連携への意識づけにつながったと考える。次に、安全な療養環境の提供に関しては、部署の特徴である高齢者や認知力・日常生活自立度の低下がみられる患者に対し、尊厳を守りながら安全を担保できるよう引き続き倫理的感性を高めていきたい。今年度は働きやすい職場風土の醸成に対する活動がすすまなかつたため、次年度はロールプレイやアサーティブコミュニケーションについて話し合う場を持ち、互いに相手を思いやった言葉かけができるよう取り組んで行きたい。
5階病棟	「安全で専門性の高い看護を提供できる人材を育成し、患者・家族に寄り添った看護の提供 安心して働き続けられる職場作り」に取り組んだ。レベル3b以上のインシデントは2件と減少し、レベル1以下のインシデントは昨年度より増加しており、報告が習慣化しつつあると評価する。手指消毒剤の使用量については、一時的に目標値を達成するが、持続しないため、今後の課題である。専門性の高い看護を提供できる人材の育成について、倫理的なアプローチや看護として何ができるのか、多職種と情報共有を行い、患者の個別性に応じた看護に繋げることができた。また、退院支援カンファレンスや退院後訪問を4階行う機会を得て、患者を生活者として捉え、自分たちの行った看護を振り返る機会となった。看護補助者へのタスクシフトの推進や5S活動で業務の効率化を図ることができた。反面、仕事へのやりがい感は感じつつも患者数の増加により看護師の負担感も増加した。今後も働きやすい職場を目指し、活動を継続する。
4階病棟	今年度は、整形外科の受け入れと眼科の入院期間短縮に向けて統一した対応ができるようにそれぞれ医師、多職種と話し合いの場を持ち、安全な医療の提供を実践してきた。また、他科では以前からある慣習を見直し、業務の標準化を図り、整備を行った。前年度に比べ病棟稼働率が5%増し、担当科も増えたことで業務が煩雑になりやすくインシデントが増えている現状があった。対策後も同様のインシデントが続くことから、分析を行いインシデントの結果だけでなく根本原因を探り対策を講じてきたが、内服関連のインシデントは減少していない。講じた対策が定着するよう働きかけを続けていく。今後、新病院に向けて更なる業務整理と5S活動が必要と考えている。 前期は新人、中途採用者と計11人を受け入れたことにより指導を行うスタッフの負担が大きくなつたが、時間をかけて個別性にあわせた指導を行い、教育計画を実践してきた。指導の中で、互いに学びを得ることもできた。部署全体でスタッフの教育体制を考え、互いに学びあい成長できる育成環境となるよう今後も重点的に取り組んでいこうと考えている。 4Fでも高齢者が増え、自宅退院が困難な患者が多くなり、退院支援が必要となっている。早期に退院支援計画書を立案し、毎週のカンファレンスで多職種間での情報を共有している。本人、家族が望む退院支援になるように他部署の情報を得て自分たちの知識、看護力の向上を目指していく。 チーム力測定の結果からチーム内の一體感や円滑なコミュニケーションの低下があった。今後は、お互いを認め合い尊重し個々の能力がさらに発揮できるような病棟作りを実施し、安全安心な看護の提供ができる病棟にしたいと考える。
3階病棟	令和6年度は、「実践に繋げるための知識の習得」を課題に各係が活動した。内容としては、机上訓練やシミュレーション研修、認定看護師によるフィジカルアセスメントの勉強会を開催し、知識の向上をはかった。今後は、習得した知識を実践に繋げ、災害時の対応や高度医療が必要な患者の看護が出来るスタッフの育成を行っていく。 また、重要インシデントや類似インシデント発生時には、医療安全係が中心となり、4M5E法で5事例の分析を行い、事例の原因調査と対策を考え再発防止に努めた。今後は、スタッフ全員のリスクアセスメント力の向上と、インシデントに対する改善策の評価・修正を行っていくことが課題となる。さらに、緊急入院を受け入れられる体制を整えられるよう業務改善を行い、それぞれの専門性を発揮させ成果に繋げていく。そして、多職種と協働する中で、多様な価値観に対応する場面が多いため、アサーショントレーニングで得た知識を実践し、対話を通して相手の考え方や価値観を尊重した対応ができるようにする。
新生児科 病棟	今年度、「患者に寄り添った安全安心な看護を提供する」を重点目標にあげ、3つの目標をたて実践した。KPSを活用し、看護実践能力の向上と安全な看護の提供では、15分勉強会を取り入れ、身体を動かし実践したこと、高度医療（低体温療法、NO療法）や挿管介助などの物品準備、機器の組み立て等がどのスタッフも安定し行なえるようになった。このことは、スタッフのポジティブ度の増加にも繋がったと考える。来年度も勉強会の開催を

	<p>継続していくにあたり課題として、教える側が同じレベルで教えられるよう教える側の目的の統一を図っていくことである。</p> <p>インシデントはマニュアル不履行や同類のインシデントが多かった。今後安全な医療を提供していくためには、日頃の看護実践の確認と、スタッフの「安全な看護とは」というところの意識付けが重要となってくる。日々「安全な看護とは何か」を考える機会を作っていくことが必要と考える。</p> <p>カンファレンスは、医師や多職種とともに定期的な開催が定着している。今後の課題としては、その結果が計画に反映され多角的なサポートや記録に確実に残していくことである。医療安全の面からも、記録の必要性を周知し適切な看護計画の立案を行っていく。</p>
ICU 病棟	<p>今年度は ICU/HCU の役割として、緊急入院、重症患者の受け入れを円滑に行い、早期治療に繋げる体制を検討した。部署全体でスタッフが意見を出し合う中で、早期に受け入れようとする意識の変化が見られ、ICU、HCU 双方が互いに声を掛け合い協力する意識が高まった。</p> <p>患者の人権を大切にする看護として、倫理カンファレンスを開催した。昨年度からの取り組みで、患者の背景から自発的に倫理カンファレンス開催の提案があがるようになった。今後もカンファレンスの必要性を理解し、特別ではなく自然にカンファレンスが開催できるようにしていきたい。</p> <p>重症度の高い患者の入室が増加し、呼吸器など新規の医療機器が増え、さらなる医療知識が必要とされている。CE 等多職種と連携し、看護の質を維持しながら知識だけではなく確実に実践出来るよう協働している。互いを支え合いチームとしての力を発揮し、患者の人権を尊重した安全な看護が提供出来るよう今後も取り組んでいく。</p>
手術室	<p>手術を受ける新生児から高齢者の退院後を見据えて、安心安全な看護を提供することを重点目標として取り組んだ。新生児から高齢者まで様々な手術を受ける患者が安心して手術を受けられる環境について一人一人が考え、改めて患者を理解することから始めた。そして、術前訪問を個別性のある手術看護につなげるなどの取り組みを行った。診療拡大や新病院開設に向け人材育成も進めているが、術式の多様化や手術件数増加の状況下において、看護の質を保ちながら計画的に人材を育成していくためには、更なる教育計画の見直しが課題と考える。</p>
外来	<p>外来患者・家族が必要とする支援に気づき、当院に通院する患者・家族の満足に繋がる看護の提供を目指し、『患者・家族により創刊後の提供』『多職種連携の強化と人材育成』『安全な看護を提供するための患者確認行動の定着』に取り組んだ。倫理的感覚を高めるための取り組みとして『日常倫理』についてスタッフ同士で語る機会を設けたことは有用であったと評価する。診療体制が変化する中で、安全・安全な医療・看護を提供していくために、引き続き多職種連携の強化とスタッフの育成に取り組んでいきたいと考える。</p>
相談支援センター	<p>「相談業務・入院支援を充実し、患者及び家族に安全・安心な質の高い看護を提供する」をスローガンに、主に各部門との連携による患者の個別性にあわせた入退院支援の実践、PFM 運用に向けたシステム構築、多職種協働による働きやすい職場環境作りに取り組んだ。各スタッフの担当病棟を決定し、病棟カンファレンスへ参加することにより、入院支援を行った患者についてスタッフが主体的に部署内で情報共有するようになり、介入が必要な患者について、早期から病棟及び関連部署との連携し患者支援に繋げる事が出来たと評価する。また、大腸内視鏡検査説明の視聴覚資材を自宅でも視聴できるようにしている最中である。今後も患者・他部門からの意見を参考に、質の向上に努めていく。</p>

3 看護部職員配置状況

看護単位：9 単位

常勤看護要員：看護師 331 名 助産師 36 名 介護福祉士 3 名 看護補助員 2 名

会計年度任用職員：看護師 18 名 助産師 2 名 介護福祉士 6 名

看護補助員 1 名 職員看護クラーク 8 名

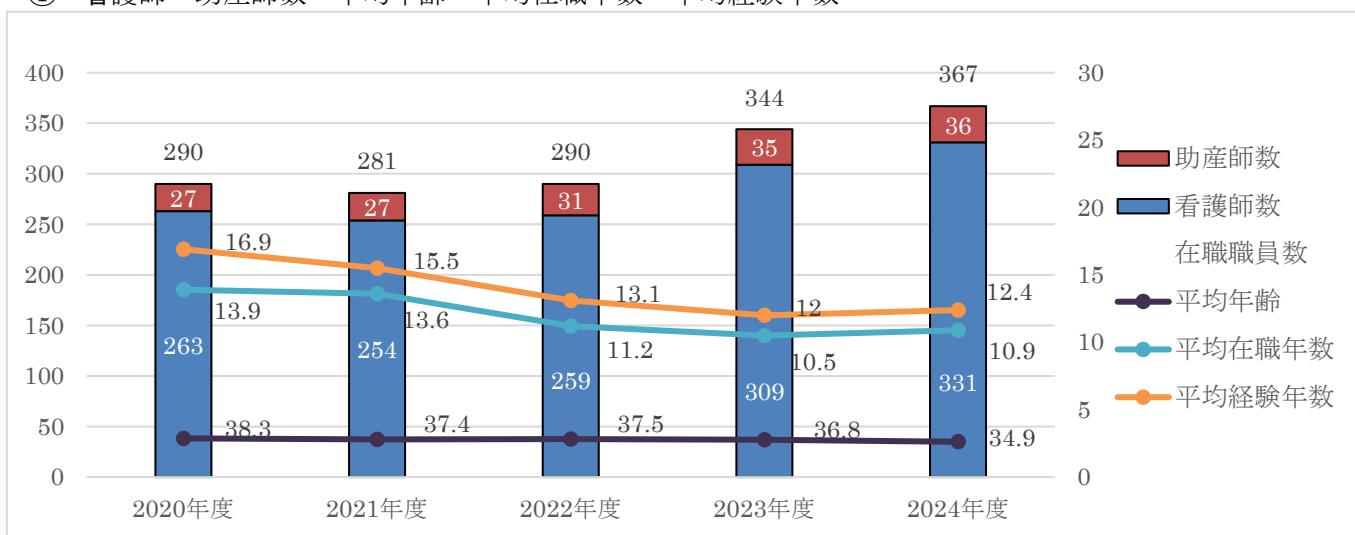
委託看護補助員：45 名

部署配置

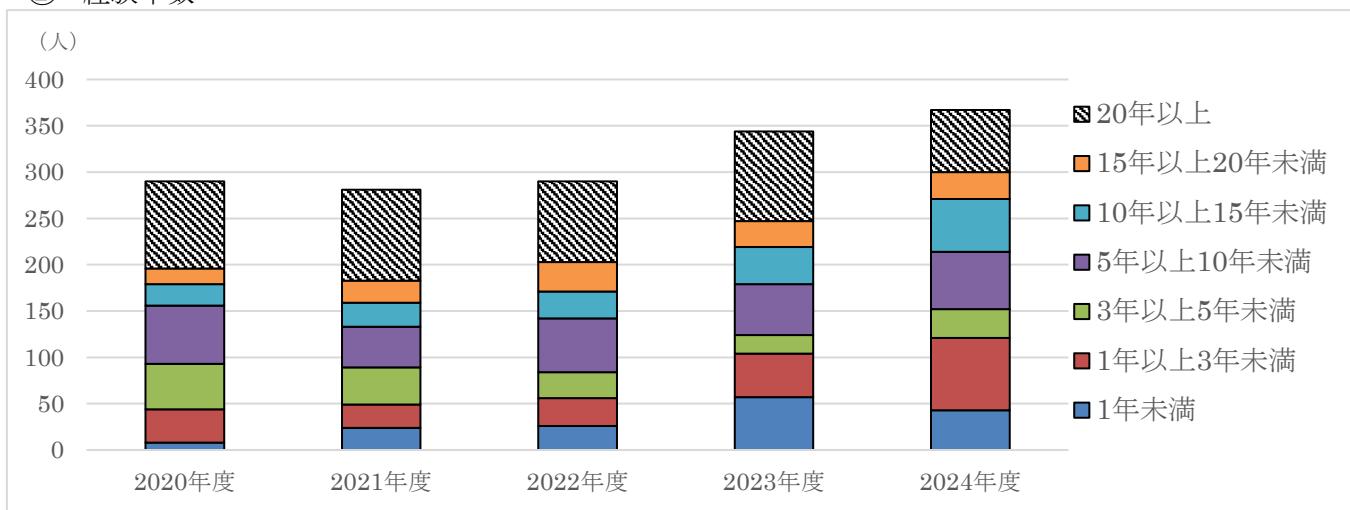
看護単位	病床数	看護配置
7 F 病棟	44 床	7 対 1
6 F 病棟	53 床	7 対 1
5 F 病棟	50 床	7 対 1
4 F 病棟	44 床	7 対 1
3 F 病棟	42 床	常時 7 対 1 夜間 9 対 1 小児入院医療管理料 1
N I C U	21 床	常時 3 対 1 新生児特定集中治療室管理料
G C U	25 床	常時 6 対 1 新生児回復期入院医療管理料へ変更
I C U ・ C C U	ICU4 床 HCU10 床	常時 2 対 1 特定集中治療室管理料 常時 4 対 1 ハイケアユニット入院医療管理料
手術室	5 部屋	

4 職員動向（令和 5 年 3 月 31 日時点）

① 看護師・助産師数・平均年齢・平均在職年数・平均経験年数



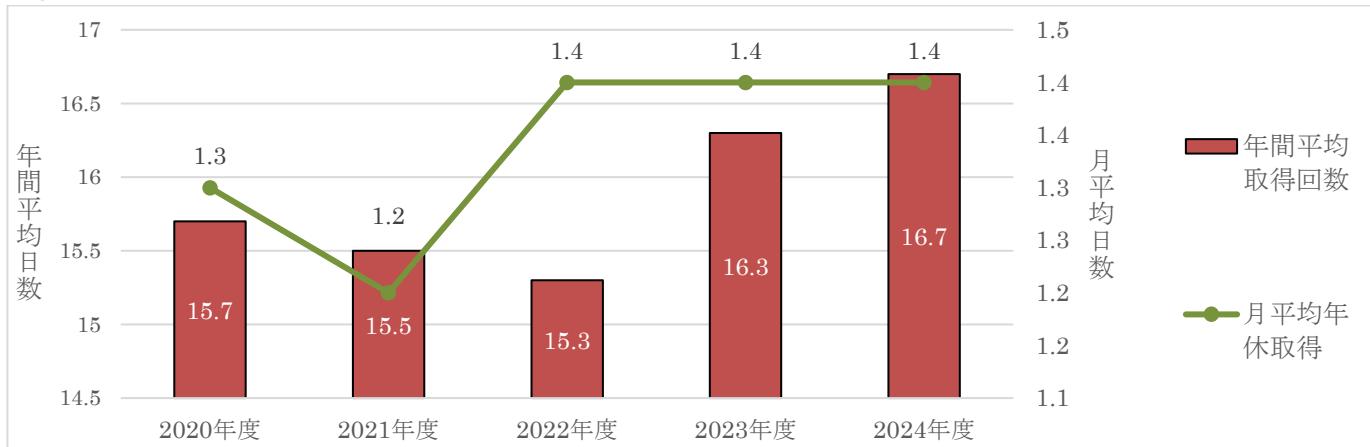
② 経験年数



③ 産休・育休・特別休暇等の取得状況（令和6年度3月31日時点）

	産休	育休	部分休	育児短時間 夜勤無	育児短時間 夜勤有	介護	病休	休職	計
人数	25	38	15	13	8	2	37	3	141

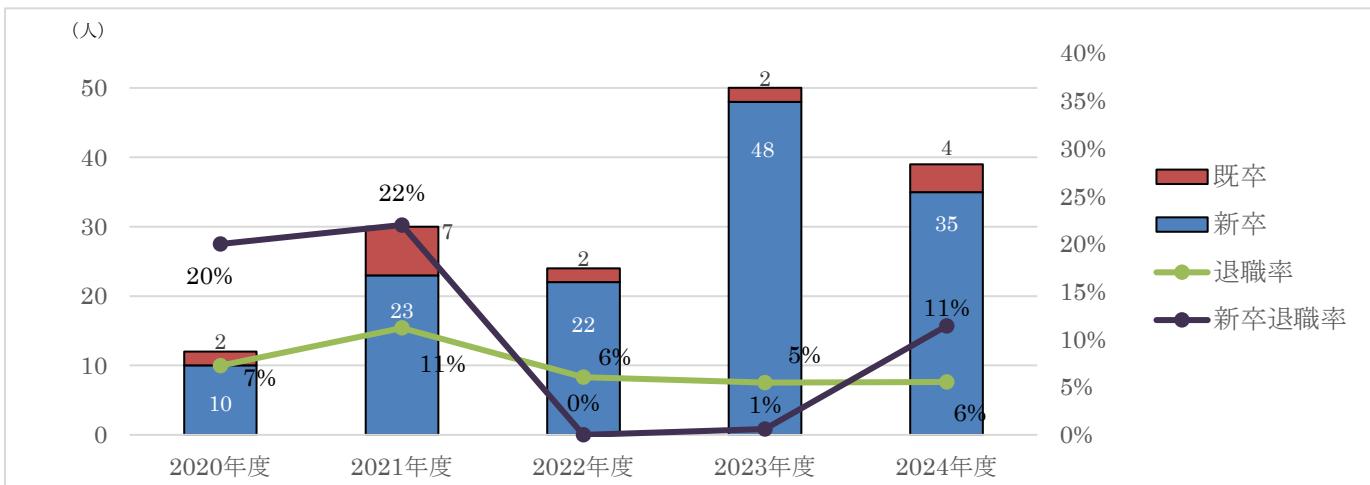
④ 年休取得状況



⑤ 夜勤選択割合（2交代と3交代）（令和6年3月31日時点）



⑥ 採用と退職者数（令和6年3月31日時点）



5 研修受講状況

① 院外研修受講状況

	全体	フルタイム 勤務	部分休 勤務	短時間 勤務
研修対象者数（人）	301（産休・休職等除く）	265	15	21
院外研修・学会受講数（人）	197	184	4	9
院外研修受講率	65.4%	69.4%	26.6%	42.8%
e-ラーニング受講率		82%		

② 院内研修受講状況

ラダー	研修数	研修延べ日数	時間数	参加延べ人数	延べ時間数
新人	10	32	113	537	1896
I	16	31	143.75	695	2431
II	14	25	85	199	673.5
III	9	13	45	90	325
IV	4	10	28	90	294
看護補助者	5	5	5	97	97
合計	58	116	419.75	1708	5716.5

6 委員会活動

各委員会	活動内容
教育委員会	改訂された「千葉市立病院キャリア開発ガイド」を基盤に、年度目標を2つ掲げ活動した。目標の1つ目は、『“学びたい”を支援する』ことであり、学びの機会を増やすことを目的に、研修プログラムを計画した。研修項目は、22項目増やすとともに、研修時間も197時間拡大した。研修を運営するうえでは、最低催行人数に満たないことを理由とした研修の中止や研修の準備等に係る教育委員の時間確保が課題となった。また、目標の2つ目は、『“循環”を支援する』ことであり、日常の看護を研修内で共有する、リフレクションシートでの振り返りを継続する、等の取り組みを行った。 今後は、研修等の学びの機会を看護実践のプロセスの一つとして意識し、さらに“学びたい”と“循環”を支援していくことが課題である。
臨地実習指導委員会	実習の受け入れに伴い、臨地実習がスムーズに展開できるよう実習の体制を整備した。具体的には、実習の目的に合わせた指導が行えるよう、学校との事前打ち合わせを継続し、実習時の内容を委員会で情報交換、検討した。また、病院説明資料、実習のマニュアルを見直し、指導に活かせるようにした。
業務基準・手順委員会	看護基準・手順の見直し・新規作成をはじめ、看護補助者の業務基準・手順の整備に取り組んだ。また、定期薬セットのタスクシフトは全部署で実施できた。さらに、臨床工学科と協働しフットポンプの中央管理を開始した。 新病院移転に向けて、安全で質の高い看護の提供を目指し「院内標準」を基本に物品や基準・手順を多職種と協働し整備していく。

記録委員会	<p>電子カルテシステム変更に伴う看護記録記載基準を変更した。また、地域連携に必要な成人用看護サマリの様式を入力の簡便化と情報共有がしやすい様式に変更し、運用を開始した。また、小児用の看護サマリも同様に変更した。次年度、変更後の評価を行う。最新の看護診断に付随する看護計画のマスタ作成を行った。病院機能評価の結果より統一した院内の略語集作成に取り組んだ。急変時の記録に関して、タイムリーに記録がしにくい状況からテンプレートの導入の検討を行った。</p> <p>次年度、急変時のテンプレートの作成、看護指示セットの見直し、記録監査票の見直しと監査方法の検討が必要と考える。</p>
看護師助産師会	<p>新入職会員に歓迎の記念品を贈呈した。会員にむけた講演会は、講師に川下直人氏、山下晃平氏を招き、「お金に関する制度やしくみについて得た知識や情報を今後のキャリアプランに役立てる」をテーマに講演をうけた。今後も、看護師・助産師同士の親睦・研究・教育を通し自己研鑽を図れるよう、会員の支援を行う。</p>

7 看護実績

① 専門領域の強化

日本看護協会認定の専門看護師【母性】1名、認定看護師【新生児集中ケア、緩和ケア、糖尿病看護、皮膚・排泄ケア、クリティカルケア、集中ケア、感染管理、乳がん看護、がん化学療法看護、摂食・嚥下障害看護、認知症看護】15名は、質の高い看護を提供するとともに、院内・院外の講師として活躍している。

また、学会認定の認知症ケア専門士取得者は、「院内デイケア」の計画など増加する高齢者への活動に積極的に介入している。

・専門看護師・認定看護師 活動状況

分野	クリティカルケア領域：宮崎 智雄、岡崎 麻衣
実践	新生児から超高齢者の重症患者の受け入れを継続している。令和5年度後期に特定集中治療室管理料3を新規取得し、重症患者及び新たな診療科患者の受け入れに必要な医療が即時に提供できるよう環境を整えた。また、重症患者の新たな合併症・ADL低下予防のため、ケアの介入方法選択の共有を図った。家族の面会時の状況の記録漏れを最小限に努め、家族の状況を多職種間含めて情報共有し家族の継続看護につなげた。管理的な側面では、新たな医療機器を導入する際に、多職種と連携しながらチェック項目を検討し、安全管理に努めた。同時に、新病院も視野に入れ、生体情報のモニタから電子カルテへの送信や重症経過表の整備、多職種カンファレンス等、重症患者の情報が多職種で共有されるよう取り組みを行っている。
指導	看護師のフィジカルアセスメント能力向上を目的に、経年別研修の講師を継続し実施している。研修の成果や課題を明らかにするためのデータ収集を行い、次年度以降につなげていく。また、地域の医療職に対し、人工呼吸関連の勉強会を実施した。
相談	他部門、他部署と組織横断的に医療機器や人材育成などの相談に応じている。

分野	母性看護：阿部 祥子
実践	対象者に対し、母親意識の形成・発達支援・母親役割支援を行っている。院外での勉強会で事例の発表を行い、参加者からの助言を得て今後の支援につなげた。また外来から1ヶ月健診までの切れ目ない継続支援として、外来初診時に実施するFASTチェックリスト、外来での面談、訪問指導連絡表の内容を分析しFASTチェックリストの内容の見直しを行った。結果、妊娠早期から地域や病棟への情報提供を開始することができ、退院後も速やかに地域に情報をつなげ、対象者に支援を提供することが可能となった。昨年度の訪問指導連絡表の記載は95件であった。
教育	病棟ではスタッフ対象に分娩の振り返りについて勉強会の実施やスタッフ自身の看護実践に対するリフレクション、看護研究の支援を行った。その他NICUスタッフ対象に出産後の母親の身体・メンタルについて、院内教育でラダーⅢ看護師対象に倫理Ⅲ、院外では新人助産師を対象に千葉県看護協会でリフレクション、2大学で助産師、専門看護師希望の院生を対象に社会的ハイリスクの母親支援の講義を行った。
相談	病棟スタッフからの患者ケア（主に妊産婦・母乳・退院支援など）に対する相談に対応した。

分野	新生児集中ケア：平井 麻美
実践 指導	昨年度に引き続き、令和6年度も新生児看護経験の浅いスタッフを中心に一緒に看護実践を行い、スタッフ育成に取り組んだ。また、共育係と協働し15分間の勉強会を1年間継続した。挿管介助などの看護技術から、グレードA、NO療法・低体温療法準備などの高度医療関連を行うことで、新生児科全スタッフの看護実践能力の向上に繋がった。 令和6年度前半は気管チューブの計画外抜管発生件数が増加したため、発生背景などの調査を行った。調査の結果から、DOPEについて勉強会を開催した。今後も発生状況の集計と分析を継続し、計画外抜管の低減を目指した取り組みをしていく。
相談	退院支援やケア検討など、自部署内における相談に対応した。

分野	がん化学療法看護：狩野 桂子、吉田 奈帆
実践	2024年度は、胃がん患者を対象とした新規薬剤の導入に向けて多職種で連携し、レジメン登録および有害事象対応フローを作成、リーフレットの整備を行った。またICI対応フローの整備を進めると共に、夜間・休日などの電話対応を円滑に行うためのフローの作成を進めている。 患者・家族への支援では、がん看護外来においてがん関連認定看護師が協働し、がん相談279件、IC同席107件／計386件の対応を行った。 一般市民を対象とした実践においては、高校生を対象とした『がん教育』の授業を行った。
	院内看護師の育成として院内ラダー研修において、ラダーⅡ看護師対象に『がん看護基礎』、ラダーⅢ看護師を対象とした『がん看護』の講師を担当。病棟別勉強会の講師を担当した
相談	主に所属部署および外来化学療法室スタッフより、意思決定支援や有害事象（アレルギーや血管外漏出など）への対応、療養環境調整の対応についての相談あり。必要に応じて患者面談を行うと共に、部署スタッフが主体的かつ継続的に介入を行なえるよう支援を行うと共に、薬剤調整に関する医師からの相談への対応も併せて行った。

分野	乳がん看護：中村 志穂
実践	<p>すべてのがん患者に対し、意思決定支援や治療に伴う有害事象対策、心理面支援などの専門的介入を実践するために、がん領域の認定看護師と協働し、週5日間の「がん看護外来」を運営した（計386件）。これにより、患者・家族の価値観を尊重した意思決定支援を実現することができた。</p> <p>乳がん患者に対しては、告知直後の心理的サポート、乳房切除後のボディイメージの変化に対する受容支援などを行い、個別性の高いケアを提供した。</p>
指導	院内看護師を対象に、がん領域の認定看護師と協働し、【がん看護】に関する院内研修の講師を担当した。臨床に即した内容を通じて、看護師のがん看護に対する理解と実践力の向上を図った。
相談	病棟及び外来看護師の相談に応じ、患者の言動や症状をもとにアセスメントを実施し、患者のニーズに即した看護のあり方について共に検討した。看護師の思考整理やケアの方向性の明確化に寄与した。

分野	緩和ケア：石田 敬子
実践	日本人の3人に1人が、がんに罹患する現状で院内には多くの患者がいる。患者・家族の思いや背景は千差万別である。患者・家族の個々の思いを傾聴しつつ気がかりに対して多職種で共同し、その患者に寄り添う看護ケアが実践できるように緩和ケアチームとして病棟ラウンドを実践した。また、がん領域の認定看護師と協働し、すべてのがん患者に対して専門的介入ができるように「がん看護外来」での対応を行った。スタッフの知識向上のため緩和ケアに対する症状アセスメントの勉強会や倫理カンファレンスを実践した。
指導	PCT ラウンドを通して看護ケア（薬剤調整、予防的内服指導、せん妄に対するケア）指導を行った。日々の看護実践の中で、スタッフに対して患者・家族の全人的苦痛に対するケアやコミュニケーション技術の指導を行った。
相談	病棟入院患者の疼痛コントロール難渋症例、終末期せん妄などの症状コントロールや心理・社会的に不安のある患者・家族への介入方法などの相談に対応した。

分野	摂食嚥下障害看護：鈴木 恭子、樋口 智也
実践	摂食嚥下障害に関する最新の知識を活用し、急性期から回復期、在宅まで切れ目のない支援を実践している。また、栄養サポートチームに所属し、医師や管理栄養士、言語聴覚士などと連携し、嚥下機能評価、嚥下訓練、食事形態、食事介助方法等の選択をすることで、安全な経口摂取の継続と患者様の食べる楽しみを支援している。
指導	院内ラダー別研修で看護師や看護補助員を対象に摂食嚥下や口腔ケアに関わる知識と技術に関する指導を行っている。また、NST 専門療法士の実習生を対象にも研修を開催した。地域住民に対しては嚥下機能低下予防をテーマとした講演会も開催し、地域での指導も継続している。
相談	研修や講演会を通じて、院内や地域問わず相談対応を行っている。また、栄養サポートチームでラウンドした部署からの相談にも随時対応している。

分野	皮膚・排泄ケア：鈴木 修子
実践	「ストーマがあってもやりたいことができる」を目標に、院内の多職種および地域医療と連携しながら患者支援を行っている。令和6年度のストーマ創傷看護外来件数は163件であった。本外来ではがん治療を行いながら通う方が多く、余命や身体状況から生活スタイルの変化を余儀なくされる場面も多くあり、必要な情報をタイムリーに提供しながら意思決定支援を行うことを心がけている。令和6年度の退院カンファレンスや多職種カンファレンスへの参加は40件以上に上った。 新病院開設に向け、褥瘡対策委員会として体圧分散マットレスのリース・レンタルの導入やオムツの院内管理に取り組んでいる。令和6年度の褥瘡回診件数は397件であった。事態背景に沿った褥瘡管理の在り方、人材育成について明確なビジョンを持ち、達成のための具体的活動に取り組んでいる。
指導	院内研修を通して、ラダーに応じた看護観の形成支援を行っている。創傷管理などの専門分野においては、現場のリーダーとして主体的に患者ケアを立案し実践できる看護師の育成を目標に、褥瘡リンクナースの主体的活動を支援している。患者の安楽だけではなく、医療者の労働負担の軽減を図るために、内科病棟における夜間の排泄・褥瘡管理をマニュアル化し、技術や知識の維持を図りながら、経験年数の枠を超えたチームワーク作りに取り組んでいる。
相談	令和6年度は院内新規コンサルテーション69件、病棟訪問は延べ166回であった。相談においては問題解決のための個別の具体策を提案している。日本オストミー協会千葉県支部が開催する若いオストメイトの会には毎年講師として参加し、地域との交流を図っている。患者を通して訪問看護ステーションからの相談も隨時受け、対応を行っている。

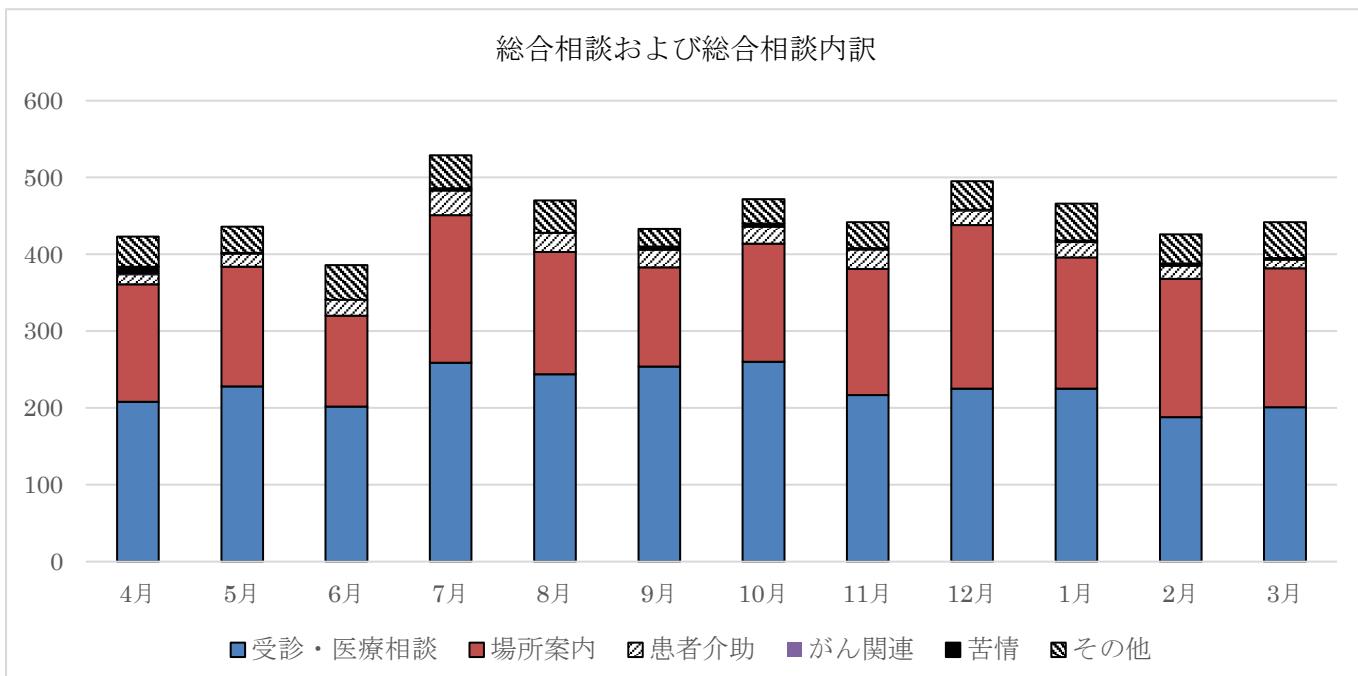
分野	糖尿病看護：水谷 幸子
実践	退院後も、血糖測定やインスリン注射が必要な患者およびその家族に対し、血糖測定やインスリン自己注射手技の指導を行った。臍性糖尿病患者に対し、個別性に合わせたシックデイのパンフレットを作成し指導を行った。糖尿病教室再開に向け、多職種と協働し運営マニュアルの作成を行った。
指導	地域の医療従事者や市民を対象とした研修会・講習会での講師として活動した。今後は、院内の看護職員を対象とした研修等を開催し、糖尿病の知識を深め、看護の質の向上を目指す。
相談	主に、所属病棟の看護職員からの薬物療法、低血糖時の対応についての相談に対応した。糖尿病患者は院内どの部署にも存在するため、自己の存在を認知してもらえるよう広報し、相談が来るのを待つだけではなく、自身から他部署に出向き相談件数を増やしていく。

分野	感染管理：高本 京子（感染対策室）、窪田 真弓（感染対策室）、大内 咲絵
実践	<p>病院内で発生する感染症の監視、対応、疫学的調査、また多剤耐性菌の保菌状況の把握と管理を行った。新型コロナウイルス感染症は5類感染症に移行し大きな流行はなくなったため、手指衛生やPPE着脱などの基本的な感染対策行動の遵守状況を再チェックした。手指衛生ラウンドを行い、5つのタイミングを知っているかどうかの確認、実際に手指消毒剤を使用してもらうなど、現状把握をした。今後も継続し、改善に努めていく。</p> <p>千葉市健康危機管理課が主催した「令和6年度千葉市新型インフルエンザ等対策実動訓練」に第一種協定指定医療機関として参加し、発熱外来の設置、保健所との調整、入院受入医療機関へ患者搬送準備等を行った。今後は、新病院での現場スタッフの動線と役割について、再考していく。</p>
指導	<p>ICTラウンドを通して、標準予防策の遵守状況や環境整備状況を確認し指導した。ASTでは抗菌薬が適正に使用されているか確認し、必要があれば適正使用となるよう指導した。院内研修は、e-ラーニング形式とし、未受講者へは受講するよう働きかけ受講率は100%だった。</p> <p>次世代の感染管理を担う看護師を育成するためにアドバンス研修、看護補助者に対して標準予防策の一部としてPPE着脱と手指衛生の実際を行った。</p>
相談	<p>認定看護師3名で看護部門の各部署を分担して担当している。相互に連携をとりながら電話やメールでの相談に応じた。</p> <p>また、部署の感染係から、手指衛生剤使用量増加に向け相談があり対応した。</p>

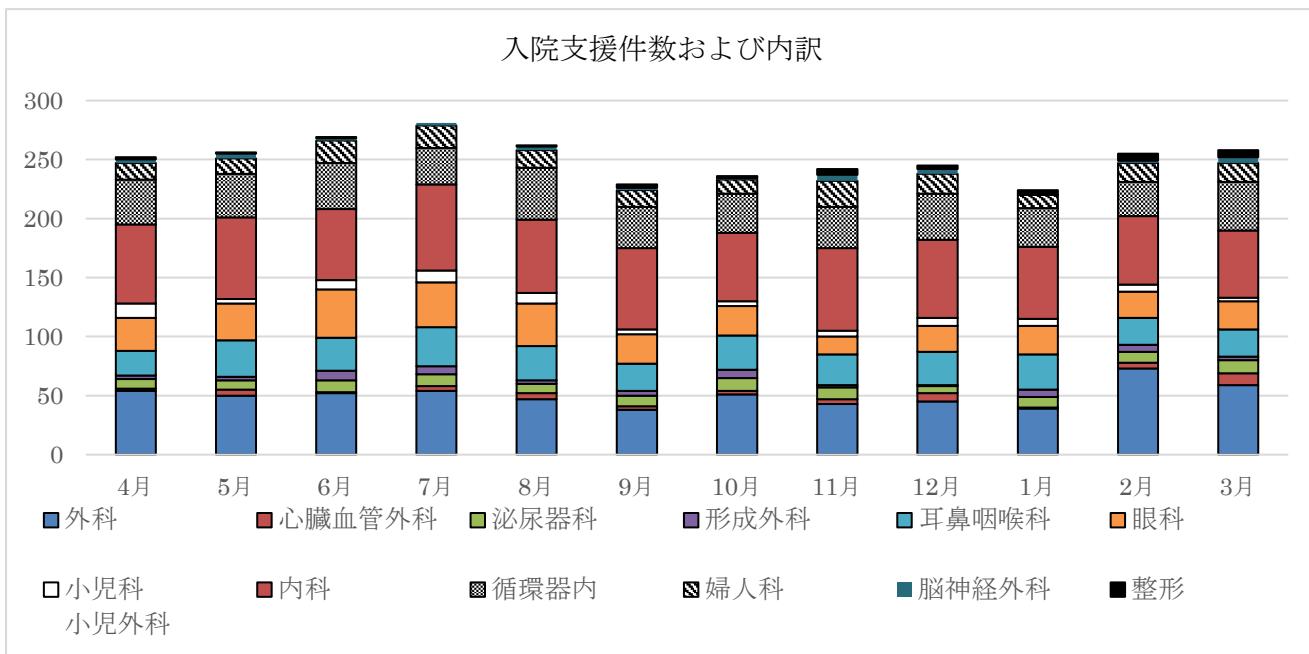
② 相談支援センターの強化（総合相談件数推移・入院支援件数推移）

（ア）総合相談及び総合相談内訳

- 総合相談件数は、前年度6775件から5420件（月平均451.7件）となった（図①）
- 入院支援は、前年度2996件から3009件（月平均250.8件）と増加傾向であった。（図②）



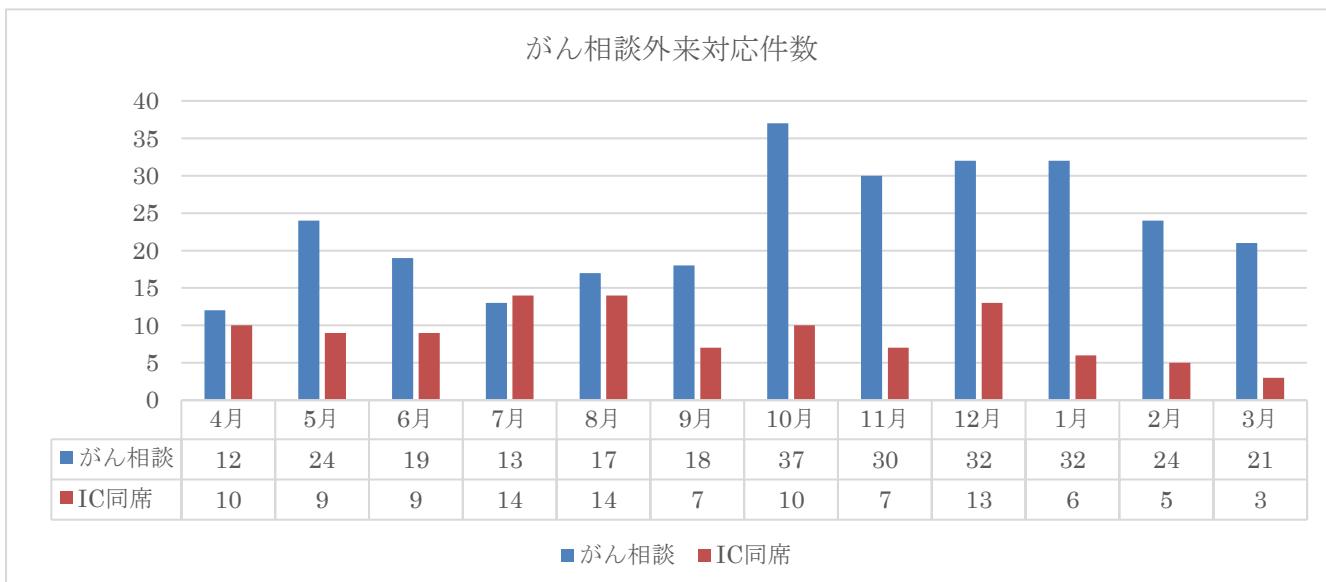
(ア) 入院支援件数及び内訳



③ 看護外来：がん看護外来・助産師外来・母乳育児外来の強化

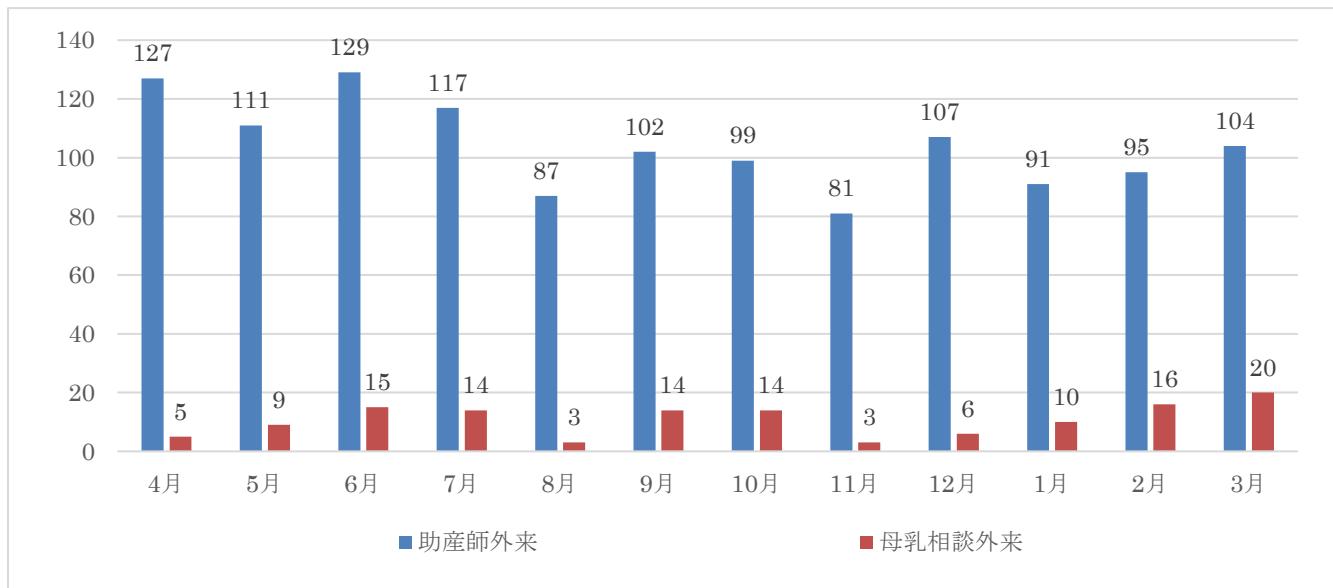
(ア) がん看護外来

- ・ 総数：386 件 内訳としてはがん相談 279 件 IC 同席 107 件であり、前年度 295 件より増加傾向であった。



(イ)助産師外来総数

助産師外来：1379 件、母乳相談外来：129 件、10 月から開始した産後 2 週間健診 81 件



- 分娩件数は、昨年度から減少しており、助産師外来数も減少傾向である。
- 今後の課題は、産後ケアの充実・母乳推進を図るための助産師外来の仕組みを再構築していきたい。

① 教育講習会（新生児蘇生法講習会）開催

コース名	開催回数	参加人数
A コース	3回	18名
B コース	4回	14名
S コース	10回	50名
合計	17回	82名

② 院外活動

(ア) 講師派遣等

年月	所属・氏名	活動内容	主催
令和6年4月～9月	新生児ユニット・松本直美	ディベロップ メンタルケアアカデミー	ドレーゲルジャパン 株式会社
令和6年12月5・6日	新生児ユニット・松本直美	第29回ディベロップ メンタルケアセミナー	日本ディベロップ メンタルケア研究会
令和6年6月20日	3階病棟・菅原遙香	医療的ケア児の宿泊学習 「げんきキャンプ」	千葉市
令和6年7月8日	新生児ユニット・平井麻美 (新生児集中ケア認定看護師)	母親&父親学級	美浜保健福祉センター
令和6年7月16日	外来・狩野桂子 (がん化学療法看護認定看護師) 相談支援センター・中村志穂 (乳がん看護認定看護師)	がん教育研修 「がんについて考え方」	千葉県立 千葉北高等学校
令和6年8月3日	5階病棟・水谷幸子 (糖尿病看護認定看護師)	知っておきたい糖尿病のはなし	社会福祉協議会 打瀬地区部会
令和6年9月6日	6階病棟・鈴木恭子 (摂食嚥下障害看護認定看護師)	嚥下セミナー	社会福祉協議会 打瀬地区部会
令和6年9月7日	5階病棟・水谷幸子 (糖尿病看護認定看護師)	知っておきたい糖尿病のはなし	社会福祉協議会 打瀬地区部会
令和6年9月11日	新生児ユニット・平井麻美 (新生児集中ケア認定看護師)	母親&父親学級	美浜保健福祉センター
令和6年9月17日	新生児ユニット・平井麻美 (新生児集中ケア認定看護師)	子育てサロン	社会福祉協議会 打瀬地区部会
令和6年11月6日	新生児ユニット・平井麻美 (新生児集中ケア認定看護師)	母性看護学方法論Ⅱ	千葉市 青葉看護専門学校
令和6年11月15日	5階病棟・樋口智也 (摂食嚥下障害看護認定看護師)	いつまでも活き活き元気に! いつまでも美味しく食べよう!!	社会福祉協議会 打瀬地区部会
令和6年11月19日	手術室・岡崎麻衣 (クリティカルケア認定看護師)	人工呼吸器について	美浜保健福祉センター
令和6年11月29日	外来・矢挽奈帆 (がん化学療法看護認定看護師)	アピアラنسケアセミナー	一般社団法人 患者家計サポート協会
令和6年12月3日	新生児ユニット・平井麻美 (新生児集中ケア認定看護師)	子育てサロン	社会福祉協議会 打瀬地区部会
令和7年2月25日	3階病棟・田辺亜紀子 (思春期保健相談士)	思春期に関する講義	千葉市立高浜中学校
令和7年3月12日	5階病棟・水谷幸子 (糖尿病看護認定看護師)	これで解決!糖尿病のぎもん	美浜保健福祉センター

(イ) 学会発表および執筆

年月	所属・氏名	テーマ	主催
令和6年5月	相談支援センター・中村志穂 (他3名)	がん領域の認定看護師協働による がん看護外来の介入状況	第9回 日本がんサポートイズケア学会

- 人材確保

今年度は、就職説明会への参加や、病院見学会の開催、看護協会主催のふれあい看護体験を実施しました。

すべて対面での実施ができ、学生の皆様と直接交流する事ができました。これからも、さまざまな機会を活用し、人材確保を推進していきます。

- 臨地実習

【令和6年度臨地実習受け入れ実績】

教育機関数	8 施設
学生受け入れ延べ人数	2154 人
受け入れ領域	基礎、成人（老年含む）、母性、小児、統合